

令和三年度

岡山白陵高等学校入学試験問題

国語

受験番号	
------	--

注意

- 一、時間は六〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があつたら、まず問題が一ページから二ページまで、順になっているかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

現在ほとんどの哲学者は、大学で教えることで セイケイ を立てている。したがって、その多くは、自身の「専門」とはかけ離れた主題について教えなければならない。研究と教育のあいだの ギャップ にはしばしば大きなものがある。たとえば、数学の哲学を自身の専門分野とする哲学者が、自身の主題について教えられるようなポストにつきことはむしる稀^{まれ}である。こうした哲学者は二重生活を送っているようなものである。ひとりで机に向かっているときには、専門の論文を英語で書くのに対して、教室では、哲学の入門的な授業をもつというわけである。日本の大学で教えているならば、それはほとんど常に日本語でなされなければならないだろう。

大学で教える世界中の哲学者の多くが置かれているのは、こうした状況である。研究と教育でこんなに違うことを扱っていて、いったいどうやって二つを両立させることができるだろうか、かれらはしばしば自問するだろう。

この場合でも、教育と研究とは両立しないわけではなく、互いに他を ホカン すると言うひとがいるかもしれない。——哲学の問題はたがいに関連しあっているのだから、どんなに専門的な分野であっても、それが哲学である限り、誰にとってもかかわりのある哲学的問いと無関係なわけではない。関連があることを見取することは、ときには、きわめてむずかしいかもしれない。だが、どんなに間接的なものであっても、そうした関連はなくてはならない。さもなければ、その分野はもう哲学に属するものではない。

これはたしかに正論ではある。しかし、これは、研究と教育のあいだに何らかの関連があるはずだということを教えてくれるだけであって、それが具体的にどんな関連であるかを告げてくれない。それゆえ、^① この答えは何の役にも立たない。

大学で教えることを選び取る限り、哲学者は教育者としての役割を引き受けることになる。そうすると、哲学者として何を教育できるかということになる。それが自身の専門とする分野でないのだとすれば、結局のところ、それは、

人が自分で考えること、そして、その考えたことを自分の言葉で表現するのを助けるといふことに尽きるのではないだろうか。

哲学者は、いくつかの一般的な概念や表現を供給することで、人が考えるのを助けることができる。そうした概念や表現が役に立つためには、それがその人の思考と言語の一部となる必要がある。したがって、この言語は英語とは限らないだろう。このことは、その母語が哲学をするために十分成熟したものになっていることが、哲学が、専門家だけのものではなく、考えようとする人すべてのためのものであるのに必要であることを意味する。

いまから百五十年ほど前に、日本の知識人は、西洋の哲学において、それまで知られていなかった新しい問題と、それを考えるための新しい仕方に出会った。この出会いから、哲学のための新しい言語を作ろうという努力が始まった。まず、新しい概念を表すための新しい語彙(注1)が創造された。そこには、日本にそれ以前からあった哲学的伝統から借りられたものもあれば、まったく新しく作られたものもあった。この語彙を構成する語の各々は、それが指そうとする概念を表すヨーロッパの語に対応すると考えられた。だが、外国語に ユライする表現であっても、それがいったん日本語のなかに組み込まれるならば、その意味は言語の全体によって決定される。それゆえ、そうした表現は、新しい言語環境のなかでは、本来もたされるはずだった意味をもち続けることはできない。

近代日本語の進化とともに、新たに導入された語のうちのあるものは、教育を受けた人たちの語彙の一部となったが、それ以外の語は、専門家だけによって使われるに留まった(注2)。この間にまた、研究者の努力によって、こうした語が表すとされた西洋の概念がよりよく理解されるようになり、新しい語彙に属する語が日本語の一部となる過程で意味するようになった概念と、もともとの西洋の概念との相違がはっきり意識されるようになった。これによって、日本の哲学者が、自分自身の責任で哲学用語を使うことが可能となった。語に何を意味させたいのかについて明確な観念をもてるのでなければ、こうしたことは可能ではない。そして、そのためには、漠然とした理解しかもてないといふ、それまでの日本の哲学用語の トクチヨウ(注3)が払拭(注4)される必要があった。

哲学の言語として日本語がそれほど不自由なく使えるようになるまでには、およそ百年かかった。それでもまだ問題は残っている。西洋哲学の古典的テキストのなかには、日本語への翻訳の伝統が尊重されるあまり、適切ではない訳語が踏襲されることによつて、専門家どうしとは限らない哲学の議論にとつて障害となつている場合がある。これとは別の問題は、こころの哲学のような専門化された分野での問題である。国際化が進んでいるこうした分野においては、英語の専門用語が日本語に翻訳されず、カタカナ書きでそのまま使われる傾向が強い。これも新しい哲学用語を日本語に組み込むためのひとつのやり方であるが、それは、専門家の理解と一般のひとの理解とのギャップという、昔と同じ問題を生み出す危険がある。

専門家のための哲学だけならば、哲学の言語として、英語以外の言語は必要ないかもしれない。しかし、哲学は専門家のためだけのものではないゆえに、日本語を母語とするひとのためには、日本語の哲学言語がなくてはならない。したがつて、^③われわれ自身の哲学言語を維持し改良することは、日本の哲学者のつとめだろう。

(飯田隆 『分析哲学 これからとこれまで』による)

(注1) 語彙……ある人やある範囲で用いられる語のすべて。日本語の語彙といえは、日本語の単語のすべてになる。

(注2) 払拭……すっかり取り去ること。

問1 線部㉔㉕のカタカナを漢字に直せ。

問2 線部㉔「ギャップ」、㉕「踏襲される」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

㉔ 「ギャップ」

ア	足かせ
イ	もめ事
ウ	関わり
エ	繋 <small>つな</small> がり
オ	隔たり

㉕ 「踏襲される」

ア	そのまま受け継がれる
イ	正しいものに直される
ウ	すぐに取り除かれる
エ	ないがしろにされる
オ	支障なく使用される

問3

——線部①「この答えは何の役にも立たない」とあるが、それに関する筆者の考えについて説明した次の文を読んで、後の問い(1)・(2)に答えよ。

「この答え」は、大学で教える世界中の哲学者が抱える「Aか」という問いに対して、研究と教育のあいだに何らかの関連があることを示唆するだけで、どのような関連であるかを具体的に示していないために、有効ではないという意味ではあるが、そもそも筆者は、たとえ教育が専門分野でないとしても、哲学者の仕事はBことだと考えているので、「Aか」という問い自体に疑問を感じている。

(1) Aに適することばを二十字以内で考えて答えよ。

(2) Bに適することばを本文から三十五字以上四十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字をそれぞれ答えよ。

問4

——線部②「新しい語彙に属する語が日本語の一部となる過程で意味するようになった概念と、もともとの西洋の概念との相違がはっきり意識されるようになった」とあるが、それらに相違が生じた原因として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 日本語が抽象的な概念を表せるまで十分成熟していないうちに、西洋の概念が日本に入ってきたことで、それを正しく表す語ができなかったということ。

イ 新たに導入された語は、西洋の概念に近い意味をもつ日本語から選ばれたので、結局日本に既存の概念しか表すことができないということ。

ウ 新たに導入された西洋の概念を表す語のほとんどは、専門家しか使わなかったので、一般的なそれを表す日本語ができなかったということ。

エ 日本語で表現された西洋の概念は、日本語の言語環境のなかでは、西洋の言語環境のなかにおける意味そのまま持ち続けることはできないということ。

オ 近代日本語の進化における初期の段階では、新たに導入された西洋の概念について、専門家でさえ漠然とした理解しかできていなかったということ。

問5

——線部③「われわれ自身の哲学言語を維持し改良すること」とあるが、どういうことか。それを説明した次の文の **I** **III** に適することばを本文からそれぞれ抜き出して答えよ。

およそ百年かけて日本語の哲学用語は整備されてきたものの、

I

が使われたり、英語の専門用語

語が **II** のままで使われたりすることで、現在もさまざまな問題が残っているので、それを解決するために、今後、日本の哲学者が **III** をふまえつつ、日本語の哲学言語を洗練していくということ。

このページに問題はありません。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「寒天て美味しいし、面白いしなあ」

美味しいし、面白い——真帆の言葉に、松吉は目を見張った。

「そうですか？ 美味しおますか？ 面白おますか？」

「うん、松吉もそう思うやろ？」

松吉は、返事が出来なかった。

確かに、初めて寒天が固まるのを見た時は、面白いと思った。慣れてしまえば、そんなことは当たり前で、特に感動はない。また、寒天そのものに味を感じたことが無く、従って美味しいと思ったことも無かった。そんな自分が寒天を扱って良いものか、という気持ちが時々首をもたげることもあったが、生きていくためだ、という現実がいつも勝った。

その長い沈黙で、真帆は答えを察したのだろう、小さな声で、しんどいな、と呟いた。

松吉は驚いて、「嬢さん、しんどおますか？ 具合わるおますのか？」と尋ねた。真帆は、首を横に振って、すくと立ち上がる。そして板場へ通じる襖を開けると、父の嘉平を呼んだ。

「お父はん」

「おお、何や真帆。今、手え離されへんのや」

へっつい（注）の前で屈んでいた嘉平が、立ち上がって応えた。真帆は、父の傍に駆け寄ると、精一杯に伸びをして、その耳元に何か囁く。

「ええ？ ①寒天のことで松吉に教えてやって欲しい、て？」

嘉平が言って、ちらりと松吉を見た。真帆のひそひそ話はまだ続いている。最初は面倒そうだった嘉平の顔が、徐々に真剣になっていく。松吉は、はっと気付いた。

——もしや、さっきの「しんどいな」は、おのれの商う品を、面白いとも美味しいとも思われへん私のことを、

それでは辛かるう、しんどかるう、いう意味で言わはつたんと違うやろか？

自分よりも五つも下の少女にそんな風に思わせたことを、松吉は情けなく思った。否、それよりも、^㉞寒天間屋の丁稚が、自分の扱う寒天に対してそんな考えでいることを知られてしまった、その恥ずかしさが体中を巡る。松吉は、嘉平の叱責を覚悟した。

「松吉、手え洗つて、こつち来なはれ」

嘉平が松吉を呼んだ。穏やかで優しい声だった。

言われるまま井戸端で手を洗い、自分の前垂れで拭こうとすると、真帆が清潔な手拭いを差し出した。それで手を拭つて、嘉平の横に立つ。嘉平は、今日、松吉が届けたばかりの寒天を少し千切り、三つに分けて、調理台に置いた。

そしてその一つを口に入れた。真帆がそれに倣い、戸惑いながら松吉も真似た。筋ばかりで決して美味くはない。

「ゆつくり噛んでみ。せや、ゆつくり奥歯で噛み締めるように」

かすかに、海藻の味がした。海藻が苦手な松吉でも耐えられる程度の味。

「お父はん、溶けてしもた」

「せやな。どんな味やった？」

「海の味や。けど、甘いとかしよっぱいとかはない。はっきりせえへん」

娘の返事に、嘉平は笑顔になり、その頭を撫でる。

「せや。味がでしゃばつてけえへんやろ？^㉟それが大事なんや」

えっ、と松吉が、^㊱怪訝そうな顔を嘉平に向けた。味が無いのが大事とは、一体どうしたわけなのか。

「松吉、これ、何かわかるか？」

へっついにかけて小鍋を示して、嘉平が尋ねる。中に、澄んだ出し汁のようなものが入っていて、ほかほかと^㊲湯気を立てていた。

「出汁ですか？」

「惜しい。これは昆布と鰹節で取った出汁に、酒と醤油を加えて、澄まし汁に仕立てたもんや。ほな、これは？」

嘉平が木桶に入ったものを、松吉に示した。それは松吉にも馴染みのものだった。

「水に戻した寒天だす」

「せや。井川屋自慢の寒天や」

にっと笑うと嘉平は寒天を自ら引き上げてぎゅっと絞り、細かく千切って澄まし汁の中へ入れた。

「寒天を丁寧に煮溶かすんやが、これは松吉に任せよか。混ぜすぎたらあかんで。腰が無のなるさかい」

松吉にへらを手渡すと、今度は玉子を取り出した。台の上で玉子の殻をこつんと割り、器用に卵白と卵黄とを分ける。そして、それぞれを鉢に入れ、箸で手早く掻かき混まぜた。

「お父はん、玉子のおつゆ、作るん？」

「まあ見ててみ」

娘に優しく言つて、嘉平は、松吉の鍋を脇から覗のぞいた。寒天は綺麗きれに溶けて無くなっていた。よし、と頷うなずいて、松吉と交代すると、嘉平は、まず、溶いた卵黄を箸先から垂らすように澄まし汁の中へ流し入れた。卵白も同様に処理して、全体を大きく混ぜる。予めたつぷりの水を張っていた大鍋に、その小鍋を浮かべて粗熱を取りながら、更に大きく混ぜた。とろとろの澄まし汁の中で、固まった卵黄と卵白がふわふわと泳いでいる。

「旦那さん、一体、何が出来るんだすか？」

好奇心を抑えきれずに、松吉は嘉平に尋ねた。

「松吉は注4いらちやなあ。固まるまで、待ちきれんのか？」

③にやにやと笑う嘉平に、真帆が、お父はん、いけずはあかん、と叱る。彼女は、板場の涼しいところに ④布巾をか
けて置かれてある木箱を自ら運んで来た。

「真帆には敵かなわんわ。これは今朝作っておいたもんや」

嘉平は、布巾を取り、木箱の中を指で押して弾力を確かめる。よし、と頷くと、慎重に中身をまな板へ取り出し、それを包丁で二寸四方注5に切り分けると、朱塗りの器に載せて、松吉の前に差し出した。

「私が考えた料理で、この真帆家の看板料理にするつもりや。『琥珀寒』と名付けよか思てる」

松吉は、思わずごくりと息を飲んだ。琥珀色の寒天生地の中に閉じ込められた卵黄と卵白。それが松吉の目には、風に舞う天女の羽衣のように映った。

「どうや？ 松吉」

嘉平に問われても、松吉は、ただ、へえ、と応えたのみで、その皿から目が離せない。

「構へん、食べてみ」

④「そんな、滅相な」

驚きのあまり、松吉は、二、三步、後ろへ飛び退いた。

「料理は食べるためのもんや。お前はんとこの寒天が、どう化けたか、しっかりその舌で味おうてみ。それも大事な修業のひとつやで」

真帆が、塗りの匙を持って来て、松吉の手に握らせる。松吉は氣後れしながらも、皿に向かった。ぶるぶると震える匙が、琥珀寒を捉える。息を詰めてひと口分。そつと掬い、やつとの思いで目の高さまで持ち上げた。明かり取りから差し込む光に翳してみると、その名の通り、きらきらと琥珀色に輝いて見えた。ほう、つと松吉は詰めていた息を漸く吐き出した。

「早よ、食べ、早よ」

真帆に急かされて、松吉は匙に載せた寒天をそつと口に運ぶ。つるりと口中に納まった途端、それは濃い旨味を放った。松吉は思わず瞳を閉じて、舌の上に神経を集中させる。

「松吉、ちゃんと噛み」

松吉を揺さ振って、苛々と真帆が声を上げる。驚いて、松吉はつい、大事な琥珀寒を噛み締めてしまった。その瞬間、口一杯に、奥行きのある味わいが広がった。昆布と鰹、それに醤油。まろやかなこくは酒の技だろうか。玉子の甘みも残る。松吉はもう夢中だった。口の中のものをしっかりと咀嚼して飲み干すと、呆然と嘉平を見た。

「どうや、松吉、わかるか？」

嘉平の問いかけに、松吉は、大きく目を見開いたまま、しかし、こつくりと首を縦に振ってみせた。そうか、これが寒天の持つ力なのか。松吉は今、自分の中で閉ざしていたものが、次々と開いていくように感じていた。

よっしゃ、と嘉平は満足そうに頷く。

「寒天はでしゃばらへん。せやからこそ、それぞれの旨味を、喧嘩させんと上手いこと、ここまで見事に引き出して

くれるんや。旨味を引き出して、しっかりと閉じ込める。これが寒天の技なんや。ええか、お前はんの商うてるのは、こないに凄^{すご}いもんなんやで」

⑤ 嘉平の言葉を、松吉は、しっかりと受け止めて頷く。胸の奥で長い間、わだかまっていた戸惑いや迷いは、すでに彼から去っていた。

⑥ 真帆が、目を輝かせながら松吉を見上げている。

(高田郁 『銀二貫』による)

(注1) へつつい……竈(かまど)。

(注2) 丁稚……商家や職人の家に住み込んで修業しながら働く少年。

(注3) けえへんやろ?……来ないだろ?

(注4) いらち……落ち着きがない人。せつかちな人。

(注5) 二寸……六センチくらい。

問 1
|| 線部㉑㉒の漢字の読みをひらがなで答えよ。

問 2
—— 線部①「寒天のことで松吉に教えてやって欲しい」とあるが、「松吉」が「嘉平」から学ぶべき「寒天のこと」とはどういうことか。わかりやすく説明せよ。

問 3
—— 線部②「怪訝そうな顔」とあるが、これは「松吉」のどのような様子を表したもののか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 料理屋の主人の言うことに対し、わけがわからなくて納得がいかない様子。
- イ 料理の専門家の言葉とはいえ、さすがにそれは違うだろうと同意しかねている様子。
- ウ 料理屋の主人の言葉が聞き取りにくかったのも、もう一度言っただろうと思っっている様子。
- エ 料理の専門家の言葉を聞いて、そういうことだったのかと得心している様子。
- オ 料理屋の主人の言ったことが理解できず、自分はこの先どうなるのだろうかと不安がついている様子。

問4

——線部③「にやにやと笑う嘉平に、真帆が、お父はん、いけずはあかん、と叱る」とあるが、その時の「嘉平」と「真帆」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。なお、「いけず」とは「いじわる」のことである。

ア 何ができるのか知りたくてたまらない松吉の様子があまりにもおもしろいので、もうちよつとじらしてやろうと嘉平は思っているが、真帆も父親を叱りながらも内心、松吉の焦り具合を楽しんでいる。

イ 何ができるのかもわからない松吉に対して、そんなことでは話にならないと嘉平は松吉をばかにしているが、真帆は松吉にいたく同情し、松吉を見下す嘉平に対して怒りを覚えている。

ウ 松吉が自分の思惑通りに何ができるのかと興味を示し始めたので、嘉平は独り悦に入っており、現状をもう少し楽しもうとしているが、真帆は早く次の展開に進んでほしいので父親の態度にやきもきしている。

エ 松吉が何ができるのか全く見当もつかないことに対して、嘉平はまだまだ半人前だなど思っているが、真帆は経験の浅い松吉なので仕方がないと思い、父親にもっと松吉を評価してもらいたいと思っている。

オ 松吉に何ができるのかと興味を持たせることができた自分の料理の腕前を嘉平は自分でも誇らしく思っているが、真帆はそんなことはどうでもよく、早く松吉に琥珀寒を食べさせてやるべきだと考えている。

問5

——線部④「そんな、滅相な」とあるが、「松吉」はどういう意味で言っているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 得意先で御馳走ごちそうしてもらったことがばれると店の主人に叱られるので、厳しい選択を迫らないでください。
イ 得意先で御馳走してもらうのはありますが、ありえない冗談はやめてください。

ウ 得意先で御馳走してもらうことは私が勤める店では禁じられていますので、謹んでお断りします。

エ 得意先の料理屋が看板料理にしようとしているものを、丁稚の自分が食べるなんてとんでもないことです。

オ 得意先の料理屋が看板料理にしようとしているものを、丁稚の自分が食べられるなんて身に余る光栄です。

問6

——線部⑤「嘉平の言葉を、松吉は、しっかりと受け止めて頷く」とあるが、この時の「松吉」の心情をこれまででの「松吉」と比較しながら、わかりやすく説明せよ。

問7

——線部⑥「真帆が、目を輝かせながら松吉を見上げている」とあるが、この時の「真帆」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 自分が父親に頼んだおかげで松吉は心の闇を晴らすことができたことを喜び、自分は間違っていないかったのだと、自分の行為に満足感を覚えている。

イ 松吉の前途を憂えていたが、父親のおかげで松吉の意識が変わったことを確信し、松吉の前途は明るいものになるだろうと思っている。

ウ 父親から習ったことを松吉はよく理解してくれたようなので、これでこの後も、この店を松吉が支えてくれるだろうと松吉への期待感が高まっている。

エ 自分より年上とは言え、子供ながらに大人に交じって働く松吉に同情していたが、今後、松吉が大人と対等に渡り合えると思ひ、安心している。

オ 自分が好きな寒天を松吉も好きになってくれたことがうれしく、また、松吉に寒天のすばらしさを教えてくれた父親にも感謝している。

このページに問題はありません。

三

次の文章は、『おらが春』の一節である。丹後国普甲寺（注1）の上人は、年の初めの祝いをしようと、寺の小法師を使って、ある芝居をすることにした。以下を読んで、後の問いに答えよ。

昔、丹後の国普甲寺といふ所に深く浄土をねがふ上人ありけり。としの始（注2）は世間祝ひごととしてさざめけば、我もせんとて、大晦日（注3）の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したため渡して、「明日の暁に① しかじかせよ」と、きと② いひをしへて、本堂へとまりにやりぬ。小法師は元日の旦（注4）、いまだ隅々（注5）は小闇きに、初鳥（注6）の声とおなじく、がばと起きて、をしへのごとく表門を丁々と（注7）敲けば、内より「いづこより」と問ふ時、「西方弥陀（注8）より年始（注9）の使僧に③ さふらふ」と答ふるよりはやく、上人裸足（注10）にて踊り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座（注11）に請じて、きのふの手紙をとりてうやうやしくいただきて読みていはく、「その世界は衆苦充滿にさふらふ間、はやく④ 吾国（注12）に來たるべし、聖衆出（注13）むかひしてまち入りさふらふ」と、よみ終はりて、「おお、おお」と泣かれけるとかや。

（注1） 上人……すぐれた僧。

（注2） きと……しつかりと。

（注3） 聖衆……徳のある人物の臨終に際し、迎えに来る菩薩たち。

問 1 〓 線部② 「いひをしへて」、⑤ 「さふらふ」の読み方を、現代仮名遣いを用いてそれぞれ答えよ。

問 2 〓 線部① 「しかじかせよ」とは、「このようにせよ」という程の意味である。その指示内容として誤っているものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 大晦日の夜は本堂に宿泊すること。

イ 元日の朝、まだ夜が明けきらない時分に起き出すこと。

ウ 上人の住まう僧坊を訪れること。

エ 上人に尋ねられたときには浄土からの使いで来たと答えること。

オ 上人の前で前日預かった手紙を読み上げること。

問 3 〓 線部② 「吾国」とはどこのことか。本文からそれを表すことばを一単語で抜き出して答えよ。

問4

上人の芝居とは、結局どのようなものだったのか。それを説明した次の文の I I II にはふさわしいことばを、 III には漢字二字の熟語を考え、それぞれ答えよ。なお、その際、 I II にはふさわしいことばを、 III には漢字二字の熟語を考えて答えること。

上人は普段から I どの願いを抱いていたため、あたかも元日の朝に II という内容の手紙が届いたかのように振る舞い、最後に III の涙を流してみせることで年始を祝うというもの。

問5

『おらが春』の作者は誰か。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 紫式部

イ 兼好法師

ウ 松尾芭蕉

エ 小林一茶

オ 正岡子規